

日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト（研究領域 4-2）

社会制度の持続性に関する学融合的研究

日本列島の北方における毛皮、鷹、絹織物、海産物の交易

函館工業高等専門学校 中村和之

1. はじめに

「交易」から北方史をみる研究のはじまり

2. 古代の北方地域における交易

阿倍野比羅夫と肅慎との交易 ^{みしはせ} 綵帛・兵・鉄など

3. 毛皮と鷹の交易

銀鼠（オコジョ）の沈黙交易 骨嵬（アイヌ）と野人、野人とモンゴル帝国・元朝
鷹の交易 海東青のために、吉烈迷に打鷹人を置く（元朝と骨嵬との戦いの一因？）
商い踊りにみる蝦夷地の鷹、江戸時代の「御鷹献上」へ続く

4. 絹織物の交易

明代の奴兒干都司における朝貢交易

清代の辺民支配と蝦夷錦

日本史料にみえる蝦夷錦

・『中外抄』の康治2年（1143）8月1日条

琵琶を入れる袋は「えぞいはぬ錦」がよい

・嘉元4年（1306）9月

越前国で押領された「関東御免津軽船」の積荷が鮭と小袖

・室町時代、若狭国内浦字山中に伝わる「商踊り」

・『新羅之記録』の文禄2年（1593）

蠣崎慶広が徳川家康に謁見した際、「奥狄唐渡の嶋」から持ち着たりし「唐衣（サ
ンタンチミブ）」を着用しており、その場で脱いで家康に献上

5. 海産物の交易、昆布と鮭

夷千島王の^{かしや}遐叉の使節が持参した、馬角、錦と昆布

^{からさけ}乾鮭の交易の開始時期

< 史料 >

1. 『日本書紀』齊明天皇6年（660）

三月に、阿倍臣 名を闕く を遣わし、^{ふないくさ}船師二百艘を率いて、^{みしはせ}肅慎国を討たしむ。

阿倍臣、陸奥の蝦夷^{えみし}を以て、己が船に乗せて、大河の側に到る。是に渡嶋の蝦夷一千余、海の畔^{ほとり}に屯聚し、河に向いて營^{いあり}す。營の中の二人、進みて急に叫びて曰く、「肅慎の船師、多く来りて我等を殺さんとするが故に、願わくば、河を済りて仕官えまつらんと欲^{おち}う」と。阿倍臣、船を遣わして、両箇の蝦夷^めを喚し至らしめて、賊の隠所と其の船数とを問う。両箇の蝦夷、便ち隠所を指して曰く、「船廿余艘なり」と。即ち使を遣して喚す。而るに来ることを肯ぜず。阿倍臣、乃ち綵帛^{しみのきぬ}・兵・鉄等を海の畔に積みて、貪^{ほし}め嗜^つましむ。肅慎、乃ち船師を陳ね、羽を木に繫^かけて、挙げて旗と為す。棹^{ととの}を齊え近づき来て、浅き処^{とま}に停りぬ。一船の裏より二の老翁を出して、廻り行かしめ、積むところの綵帛等の物を熟視せしむ。便ち単^{ひとえきぬ}衫^かに換へ著て、各布一端を提^きげて、船に乗りて還去りぬ。俄^{しばら}くして老翁更た来りて、換^{かえきぬ}衫^かを脱ぎ置き、并せて提^{ひきさ}ぐる布を置きて、船に乗りて退^{まか}りぬ。阿倍臣、数船を遣わして喚さしむ。来ることを肯ぜずして、弊賂弁嶋に復る。食頃ありて和を乞う。遂に聴し肯ぜず。弊賂弁は、度嶋の別なり。己が柵に拠りて戦う。時に、能登臣馬身龍、敵の為に殺されぬ。猶、戦いて倦^うまざる間に、賊破れて己が妻子を殺す。

2. 熊夢祥『析津志』物産、鼠狼之品

銀鼠〔和^{ぎんそ}林^{カラコルム}と朔北^{さくほく}の者^{もの}を精^{こうきゅう}と為^し、山^{いわ}の石^{われめ}の罅^{すん}の中に産^うまれている。初^{うまれたばかり}生^うには赤毛に青^{あおみが}っているが、雪^{ふれ}に経^たちま^{ちま}し^しる^くと則^{なん}ち白^{んど}なる。愈^なも年^とを経て深^へも雪^とい^てる^し者^{もの}は愈^{ひじょう}に奇^{きちょう}とされ、遼東^{りょうとう}の骨嵬^{クイ}(の^{これ}と^ころ)に之^{これ}が多い。野人^{やじん}が海^{かい}上^{じょう}の山^やや藪^{やぶ}の中に於^おいて鋪^{みせ}を設^{もう}け以^{そこ}で中国^{わがくに}之物^のと易^{ぶつし}する有^{こうえき}が、彼^{のである}と此^{やじん}とは俱^{クイ}に相^{たがい}に見^あわ^なない、此^{これ}が風俗^{ある}なので。此^この鼠^{だいしやう}の大^{ちやうたん}小^{おなじ}や長^な短^なは等^なではなく、腹^なの下^なが微^かに黄^かい。……諸^{もろもろ}の鼠^もでは惟^この銀鼠^{ぎんそ}が上^{じょう}と為^され、尾^との後^との尖^と上^とが黒^とい。

3. イブン・バトゥータ『大旅行記』

旅行者たちはこうした水なき広漠な土地をたっぷり四〇日行程を費やして踏破すると、暗黒のところまで車を降りる。そして彼らは各自で持ってきた商品をそこに置き去りにして、彼らのいつもの定め^のの停泊地^にに引き返す。翌日になって、彼らの商品を調べに返ると、その商品の前に貂、灰色栗鼠とアーミン〔の皮革など〕が置いてあるのを見つける。その商品の持主が自分の商品の前にあるものに満足すれば、そこに置かれたものを取る。もしそれに満足しなければ、そのままにそれを放置する。するとその人々、つまり暗黒〔の土地〕の住民はその毛皮類を増しておくこともあるが、時には彼らの〔毛皮類の〕品物を引き上げてしまい、商人たちの商品をそのまま残す場合もある。……なお、アーミンこそは毛皮類のなかでも最良のもので、インド地方ではその毛皮〔の外套〕が一〇〇〇ディーナールにもなる。それをわれわれの金貨に換算すると二五〇〔ディーナール〕になる。それは小型動物の皮革であり、純白色で、その長さは一シブル、その尻尾は長いので、人はそのままの状態^で毛皮にする。貂は、

それと比べると価値は劣るが、それで作った毛皮の外套は四〇〇ディーナール前後である。こうした毛皮類の特殊な性質の一つとして、それには虱が付かないので、シナのアミールたちやその高位高官たちは、その一枚皮を彼らの毛皮の外套の襟の部分に付けている。

4. ペゴロツティの『商業指南』

リスの毛皮は千枚で売る。千二十枚が千枚分となる。

白テンは千枚で。千枚は千枚。

狐、黒テン、においねこ、テン、狼皮、鹿皮、そして絹または金の着物、一枚ずつ。

5. 『元史』巻59、地理志2、

俊い禽で海東青と曰うものが有る。海の外から飛来し、奴兒干に至る。土の人が之を羅え、以て土貢と為す

6. 「勅修奴兒干永寧寺記」永樂11年(1413)

惟だ東北の奴兒干国は、……其の民は吉列迷及び諸種の野人と曰い、焉に雑居している。皆(中華の)風を聞き化を慕っているが、未だ自で至ることが能ない。況其の地は五穀が生せず、布帛を産せず、畜養のは惟だ狗だけである。或は野人がを養い、を運び諸な物を用っている。或は魚を捕える以を業と爲て、肉を食べ而に皮を衣ており、弓矢を好む。諸般の衣食之艱は、言に爲ことが勝不ほどである。……永樂九年春、特に内官の亦失哈等を遣し、官軍一千余人を率い、巨船二十五艘で、復た其の国に至り、奴兒干都司を開設した。……十年冬、天子は復た内官の亦失哈に命じて其の国に載至らせた。海西自り奴兒干に抵り、海の外の苦夷の諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし、給える穀米を以てし、宴すに酒饌を以てしたところ、皆踊躍て權忻び、一人も梗化って率わ不者は無かった。上は復た金銀等の物を以て地を擇んで寺を建て爲せ、斯の民を柔化し、……十一年秋、奴兒干の西に、満涇という站があるのをとんだ。站之左は、山が高く而に秀麗であった。是より先、己に観音堂が其の上に建てられていたが、今寺を造り佛を塑ったところ、形勢は優雅で、燦然として観る可ものがあつた。国之老も幼も、遠きも近きも濟々争って……

7. 「商踊り」(成立は室町中期から後期)

皆一樣にお並びやれ	皆一樣にお並びやれ、
若狭の浜より船にのり、	越前崎につかえたり、
伊ヨ商踊りを一踊り。	越前崎を押し出して、
加賀の湊へつかへたり、	商踊りを一踊り、一踊り。

加賀の湊を押し出して、	じかんの市へとつかへたり、
商踊りを一踊り、一踊り。	じかんの市も押し出して、
夷が島へとつかへたり。	商踊りを一踊り、一踊り。
夷が島では夷殿と、	商元では何々と、
唐の衣や唐糸や、	じんやじゃこうや、たかの羽や
商踊りを一踊り、	よるつの商仕廻りて、
いざ戻るよ我国へ、	商踊りは是迄揃ふ、是迄揃ふ。

8. 『成宗実録』140巻、成宗13年(1428)4月

南閩浮州東海路夷千島王の遐叉かしやは、朝鮮殿下(国王)に呈上します。朕の国(夷干島国)には、もとは仏法がありませんでしたが、扶桑と通和して三百余歳前に伝わりました。扶桑にある仏像・経巻は悉く求めましたが、大蔵経は元来扶桑にないので、欲しいと思って久しいけれどもまだ得ていません。貴国に求めたいと欲しましたが、海をへだてて遥かに遠く、音信を通じがたいので今になってしまいました。聞くところでは、扶桑の仏法は貴国から伝わり、朕国へは扶桑から伝わっていますので、朕の国の仏法は貴国からの東漸であります。どうか大蔵経を賜りますように。朝鮮が朕に大蔵経を与えて三宝を全くせしめれば、貴国の王化・仏法は遠く東夷にまでおよんだこととなります。大蔵経を賜れば、重ねて幣帛を厚くして使船を遣しましょう。朕の国は卑拙ではありますが、西裔オランカイ(西辺)が朝鮮と接しており、そこを野老浦といいます。野老浦(の人々)は朝鮮王の恩恵を蒙っているのに、ややもすれば返逆しているので、朝鮮王の命令があれば、征伐してその罪を罰しましょう。朕国人は、(朝鮮に対して)言語が通じ難いので、国内の扶桑人を使節とします。第一船で、馬角一丁・錦一匹・練貫一匹・紅桃色綾一匹・紺布一匹・海草昆布二百斤を進上します。

< 参考文献 >

- 榎森進「アイヌ民族の去就(北奥からカラフトまで) - 周辺民族との「交易」の視点から」(網野善彦・石井進編『北から見直す日本』大和書房、2001年)。
- 長節子『中世国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館、2002年)。
- 海保嶺夫『エゾの歴史』(講談社、1996年)。
- 瀬川拓郎「サケと交易」(野村崇・宇田川洋編『新北海道の古代』3、北海道新聞社、2004年)。
- 田中英道・田中俊子「ペゴロッティ『商業指南』・訳注」(『イタリア学会誌』33号、1984年)。
- 楊暘『明代奴兒干都司及其衛所研究』(中州書画社、1982年)。